
深窓のプレイヤー

みねひこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

深窓のプレーヤー

【コード】

N0717R

【作者名】

みねひこ

【あらすじ】

「それは、殺しちゃえばいいんじゃない？」

少女は真顔でそう言った。

1章

1

「それは、殺しちゃえばいいんじゃない？」

少女は真顔でそう言った。

水色のセーターに、丈が短めの黒いスカートを履いた彼女は可憐に過ぎて、物騒なこの界隈にそぐわなかった。

ただ、奇異と言えば、少年の方も他人を言えたすじ合いではなかった。貧困街の一角にある、廃車同然の車ばかりがまばらにあるぼろい駐車場に、真つ裸でうずくまっているのは尋常ではない。

「何を言ってるのさ。冗談でも、そんなこと言わないでよ。僕のお母さんなんだよ。」

少年は、至極当然の道理を説いたつもりだった。だが―

「大丈夫、実名報道はされないわ。むしろ、母親があなたにした仕打ちを知ったら、世間の同情が集まるくらい。保護施設に入れば、今よりずっと安全でいい暮らしができるわよ。」

まったく、かみ合わなかった。少年は困惑した。

「いや、そういうことじゃなくてさ。僕はお母さんを殺したくないかないってこと。」

少年の言葉に、少女は小首をかしげた。

「なんで？ あなた、馬鹿な両親の夫婦喧嘩のとばっちりで、裸で追い出されたりしたんでしょ？ それも、初めてじゃないのよねえ、そんな理不尽な目にあうの。で、それをするのはお母さんで、お父さんは助けてくれないと。なら、まず打倒すべきはお母さんよ。お父さんがあなたとどう向き合うかは、その後で見極めればいい。」

「だから、打倒したくなんかないんだって、お父さんもお母さんも」

少女は徹頭徹尾、常識を会話の土台にするつもりはないようだった。少年は攻守の交代を試みた。

「君だって親を殺したくはないだろう」

「わたし、親いないもの」

即答だった。少年はショックを受け、うなだれた。

「ごめん」

「？」

「…」

少年がバツ悪く黙り込むのと同時に、少女も自分の考えに沈んでしまった。二人はしばらく、隣り合って座ったまま、そうしていた。少年は吸い寄せられるような少女の深い美貌に、どぎまぎしていた。

この子はなんなのだろう。身なりはいいし、学校はもちろん、テレビでも見たことがないくらい可愛らしい。なのに言うことは辛辣で、まさかとは思うが、本気だとすれば恐ろしい。

こんなうらぶれた街のはきだめで、素っ裸でいる自分を追及しているのは不思議だ。

夏を過ぎて、急速に冬を迎えようとしている秋の夕暮れ時だった。

「二人で話してもらちがあかないわね」

少女がようやく口を開いた。そのセリフに、少年も同意だった。

「お母さんも交えて話しましょう」

「ええ…っ？」

少年はがく然とした。

「任せておいて。わたしは国どころか、世界を救う器よ。あなた一人の人生を好転させるくらい、朝飯前よ」

少女は大真面目な顔を崩さなかった。「冗談よ、と笑い出すのを待たが、少年は自信に満ちた瞳を受け止めるだけだった。

「ん…ええっとうち来るの？」

「そうよ」

少年は少女のエネルギーに逆らえない気がしてきた。だがしかし

…。少年は言葉を絞り出そうと苦心した。

「あ、ごめんなさい、気がつかなくて」

少女は言うが早いのか、さっと水色のセーターを脱いだ。薄手の白いシャツの姿になる。あっけにとられる少年に、すっぽりとかぶせる。少年の鼻腔に、少女のきの匂いが、決して不愉快でなく包んで届く。

少年が遠慮して袖に手を通せないでいるのを誤解した少女は、セーターの着方を指導する。

「さ、腕を出して。あ…」

少女は視線を下に向けると、動きを止めた。悩ましげに、自分のスカートを見ると、意を決したように、手を留め金に伸ばした。

「わあっ、待った待った！」

少年はあわてて袖に手を通し、少女の手をつかんで止めた。少女は不満そうな顔になった。

「なによ、下半身からも風邪は引くわよ」

「それはこっちのセリフだよ。いや、そうじゃない。その、セーターありがとう」

少女はにっこりと笑った。少年の胸がずきりとした。嫌な痛みではない。

「ちよつとは暖かい？ わたしの体温も残ってるでしょ？ だけど、スカートが嫌なら、せめてこのシャツを巻いたらどうかしら」

シャツの前ボタンにかけようとした手を、少年はまたつかんで止めた。

「そういう問題じゃないから」

非日常的な彼女とのやりとりに、少年はめまいを感じてきた。

「ここらここらここら。こんなところでなにやっとなるか」

突然大声がやって来て、少年はびくりとして、慌てて焦点を現実に戻した。

「ほう、ちちくりあつとなるのか、ガキ同士で。いかなあ、けしからん」

姿を現した大人は、汚らしい服を重ね着て、伸ばしっぱなしの髭と髪はただらに白く、べとついた感じだった。

「ごめんなさい、すぐに行きます」

少年は本能的に、少女を背にして立ち上がった。後ろ手に伸ばすと、少女は素直にその手を握った。そのまま、大人から離れようとする。

「おーっと、待てよ」

大人は無遠慮に少年の肩をつかんだ。綺麗なセーターが汚されて、少年が嫌な顔をする。

バシッ

「いてっ！」

大人が手を引っ込めた。少女がすごい速さで靴を抜いで、それでもって力一杯、大人の手をひっぱたいのだ。

「彼はわたしの保護下にある。手をかけるとは、なにごとか！」

信じられないような大喝が、少女の口から飛び出て響いた。

「は、はは…。これはこれは…」

大人は声をかすらせ、言葉をつまらせた。体格差に関わらず、笑い飛ばせない迫力を、少女は帯びていた。

「大人にそんな口を聞くもんじゃないな、お嬢ちゃん。何かの漫画の真似か？ けしからん。まったくもって、けしからん。ほ、なんだ、ぼうずはちんちん出しとるじゃないか。こんな人目隠れた場所であ。なるほどなあ…」

喋っているうちに、大人は自信を取り戻していた。いやらしい笑みを口許に貼り付け、二人の出口への進路方向をふさいだ。

不動の姿勢で睨みつける少女の、ぷっくりと膨らみかけた胸に、薄手のシャツの上から手を滑らせた。

少年の血相が変わった。

「！！！」

声にならない唸り声をもらして前に出る。足の震えも断固として忘れた。

少女が少年を片腕で制止した。すると、スカートのポケットから携帯電話を取り出し、素早くダイヤルする。

「てめっ…」

大人が取り上げようとするが、少女はひよいひよいとよけて、しかるのち、

「たすけてー！」

と携帯に向かって叫んだ。

少女はそれ以上は言わず、黙って携帯をしまった。

どこでどんな危険にあっているのか、説明しなくていいものだろうかー少年は疑問をいだいたが、警察を呼んだ経験はないので、そんなものだろうと納得することにした。

少女は依然として、硬質な無表情で大人をにらみ続けた。一方の大人は、二人の子供に手を出しかね、かと言ってその場を去る決断もしかねていた。

「おい、いつたい、誰にかけやがった。そんなもんで誰かが来てくれると思ってるのか？ものを知らないガキは…」

少女は大人をごく当たり前に無視した。

「さて、話を戻すけど」

「戻していいの!？」

「わたしのシャツ、いらない？」

なんだか傷ついたように言う少女に、暴漢に脅しつけられている状況も合間って、少年は混乱した。

「え、いや、いらないうつていうか、君は服を抜いじゃいけないよ、

女の子だもん」

「あら、女のわたしは男のあなたよりも弱いつて言いたいの？」

「ええ？ いや、そうじゃなくなつてさ」

「わたしは免疫が普通より強い。だから、心配しなくてもいいわ」強情に、少女はシャツのボタンをはずし始めた。

「ああ、もう。ほら、そんなに気になるならさ、僕はこれ巻いてるから」

少年は目のはしで見つけたボコ無のを慌てて手にとって、腰に巻きつけた。

少女はボタンをはずす手を止め、少年の姿を品定めするよう眺めた。「おいこら、無視すんな。俺の話はおわってねーぞ！」
無視されていた大人が声を張り上げた。

「おーっと、お嬢のピンチかあ？」

また違う声が出た。その方を見ると、そろそろとガラの悪い若者たちが駐車場に入ってきた。

てつきり警察を呼んだものと思っていた少年は、彼ら若者たちをみて戸惑った。髪型も服装も自己主張が強すぎて、逆に『チンピラ』を分かりやすく表現していた。ところどころに見える刺青は気味が悪い。

「おっさーん。俺らの町で何きたねーことしてんの？てかくせーし」
「き、貴様ら、なんなんーっ」

チンピラの見事な胴回し蹴りが一閃し、大人の顔面に炸裂した。大人は昏倒し、蹴りを放ったチンピラは戯れに蹴りつけ、さらに蹴った。

「はは、すっげー」

「こ・ろ・せ あらよっつと」

チンピラたちは口々に囁し立てた。うづくまる大人の顔面や腹などの弱い部分を狙って、チンピラは執拗に蹴り続けた。

「ちよつと、やめさせないと」

少年の切羽詰まった様子を、少女はきよとんとして見返した。

「え、なんで？」

だめだ、と少年は確信した。意を決して、進み出る。

「も、もう、やめてください！」

「はあ？」

突然、声を張り上げた少年に、チンピラは腹を立てたような、戸惑ったような睨みをくれた。

「俺たちや、あんたらに呼ばれて、あんたらを助けに来たんだらう

が。それがなに、その悪者扱い。やってられねーな」
ゆらり、と少年との間を詰める。

その隙を見計らって、うずくまっていた大人が跳ね起き、出口に向かつて猛ダツシユをした。即座に、チンピラの群れが殺気立って取り囲もうとする。

「やめとけい！」

少年と対峙するチンピラが制した。彼がリーダー格なのだろう、群れは動きを止めた。大人は不満げな群れにこづかれながらも、脱出を遂げた。

「さあて、お望み通りか、おぼっちゃん。俺たちは今度はなにをいたせば、お気に召しますかねー」

殺気を帯びてリーダーが間を詰め、おもむろに蹴りをはなった。少年は腹に痛みを予見して、ぎゅっと目をつぶった。

「うおっ」

どさっ、と音がした。少年の体にはなんの衝撃もなかった。

目を開けると、リーダーがひっくりかえっていた。少年の脇には、いつの間にか少女が立っている。

「なんだあ？」

リーダーは勢い良く立ち上がり、少女に向かって乱暴に手をのばした。

すると、少女は足を踏み出し、自らリーダーの手をつかみに行き、くるり、と目のくらむ速さで回った。

「ぐうっ！」

リーダーはうめき声を上げて、後ろに吹っ飛んだ。

少女は少し息を弾ませていた。目をららんとさせている。

「やるわね。腕、へし折ってやろうかと思っただけだ」

「へっ、おっかねーな」

「手首と肘、大丈夫？」

ぬけぬけとした、だが屈託のない少女の気遣いに応じて、リーダーは自分の右腕を確かめた。手首と肘を同時に逆に取りられ、容赦な

く極められたのに対し、反射的に投げられることでまぬがれたのだ。リーダーは少し顔をしかめたが、すぐに口角を持ち上げて見せる。「なんてことないよ」

「そう、よかった」

少女は、それで用が済んだとばかりに、身をひるがえした。

「お、おい……」

じわり、とチンピラたちによって出口への道が閉じられる。だが、その様子はどこか戸惑いがちだった。面子を潰したまま去ろうとする少女を、当のリーダーはにやにやと眺めるばかりだったからだ

少女はうんざりしたように、懐からまた携帯を取り出した。

「！」

少年は弾かれたように、少女の手をつかんで駆け出した。さっきはこの携帯で、チンピラの集団を呼び寄せた。今度は何を呼ぶつもりなのか、分かったものではない。

「わうわう、ちよつと、きみ？」

少女の呼びかけに、少年は断固として応えなかった。

チンピラが立ちふさがった。少年は不慣れな感情の力を借り、相手を精一杯にらみつけた。

「どいてください！」

「はあん？」

チンピラが眉をひそめる。少年は震える足元を意識しながら、右の拳を握りしめた。もう片方の少女の手を握る手にも、無意識に力がこもる。

少年を威嚇するチンピラの肩に、かたわらにいた別のチンピラの手が置かれた。

「子供にムキになんたって」

仲間のしらけた声に、チンピラは険をゆるめた。本位ではなかったらしい。

「ふふ、じゃあね」

少女はリーダーを振り返り、ウインクを投げた。それは、隣で見

ていた少年の全身をしびれさすほどの威力を持っていた。

「お、おう」

リーダーの返答を背にして、今度は少女が少年を引っ張って歩を進めた。

立ちふさがっていたチンピラは思わずといった様子で、道を譲った。少女は彼に、微笑を向けてすり抜ける。少年は彼女の手のひらの感触を今さらに強く意識しながら、その場を一緒に後にした。

「なかなか勇敢だったわね。名前は？」

角を曲がった辺りで、少女が少年に声をかけた。

「え？ あ…一柳、誠一」

少年は後ろを気にしながら、早足になりつつ、答えた。

「そう。…ねえ」

少女は歩みを止めた。つないでいた手をそのままに、ずいと近寄り、声をひそめた。

「わたしの名前、知りたい？」

少女は重大な秘密をもったいつけるように、誠一に問いかけた。

「う…うん」

他に答えようはなかった。

少女は誠一の瞳の奥まで覗き込んだ。そして、ほどけるように微笑んだ。

「蜜緒」

そう名乗った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0717r/>

深窓のプレーヤー

2011年5月7日21時25分発行